埋蔵文化財 愛知

No.12

志貴野遺跡の調査

西尾市志貴野町の洪積台地縁辺部に立地する志貴野遺跡では古墳時代後期～平安時代の遺構を多数検出した。これらは、竪穴住居、掘立柱建物を主体として展開している状況で、今回の調査区が居住域にあたっていることが考えられる。当地域において、同時代の集落遺跡は調査例に乏しく、貴重な資料と言えよう。 （6ページに関連記事記載）

シリーズ　古墳の時代

断　夫　山　古　墳　へ　の　道

前方後円墳という特徴的な古墳を中心として、尾張地域の古墳時代を概観することにしよう。

編　年

4世紀の古墳は木曽川、庄内川流域に数多く見られ、特に木曽川犬山扇状地及び海抜零メートル地帯には大規模な前方後円（方）墳が造営されている。その代表的なものに二ツ寺神明社古墳・東之宮古墳・宇都宮古墳があり、前方後方墳という墳形が目立っている。5世紀前半になると犬山扇状地で青塚茶臼山古墳が、庄内川流域では4世紀より引き続いて守山地区に前方後円墳が見られる。また名古屋台地でも中型の前方後円墳・高田古墳が出現する。

5世紀後半になると従来数多くの古墳が築かれていた尾北地方で前方後円墳が激減し、かわって庄内川流域で味美白山神社、名古屋台地では径80m の巨大な円墳、八幡山古墳が築かれる。

6世紀前半では味美二子山古墳・小幡長塚古墳、そして県下最大の前方後円墳断夫山古墳及び白鳥古墳が造営されるにいたり、尾張地方の前方後円墳最盛期を迎える。

6世紀後半になると再び様相が一変し、前方後円墳は木曽川流域のみにほぼ限られる。曽本二子山古墳は最後の大規模な前方後円墳である可能性が高い。

犬山扇状地と名古屋台地

右の編年表を見ると、一つの注目すべき事実が認められる。前方後円（方）墳を中心とする古墳の造営は、左上の部分、つまり木曽川水系犬山扇状地と、右下の部分、名古屋台地との二つの部分にまとまる傾向が認められる。

左上から右下へと、4世紀～5世紀前半での木曽水系の活発な造営活動がやがて5世紀後半～6世紀前半にかけて名古屋台地へ移動したかのように受けとめられるのである。この一見、見掛け上での古墳造営の移動は、実はその間にある集団の存在を介することにより、まったく異なる、個々別々の動きであることが理解されるのである。では、その集団とは何か。それは庄内川水系の味美地区に割拠した一群の集団の存在である。白山藪古墳に始まり、味美二子山古墳へと連続する造営活動に注目しておく必要がある。

味美と断夫山古墳

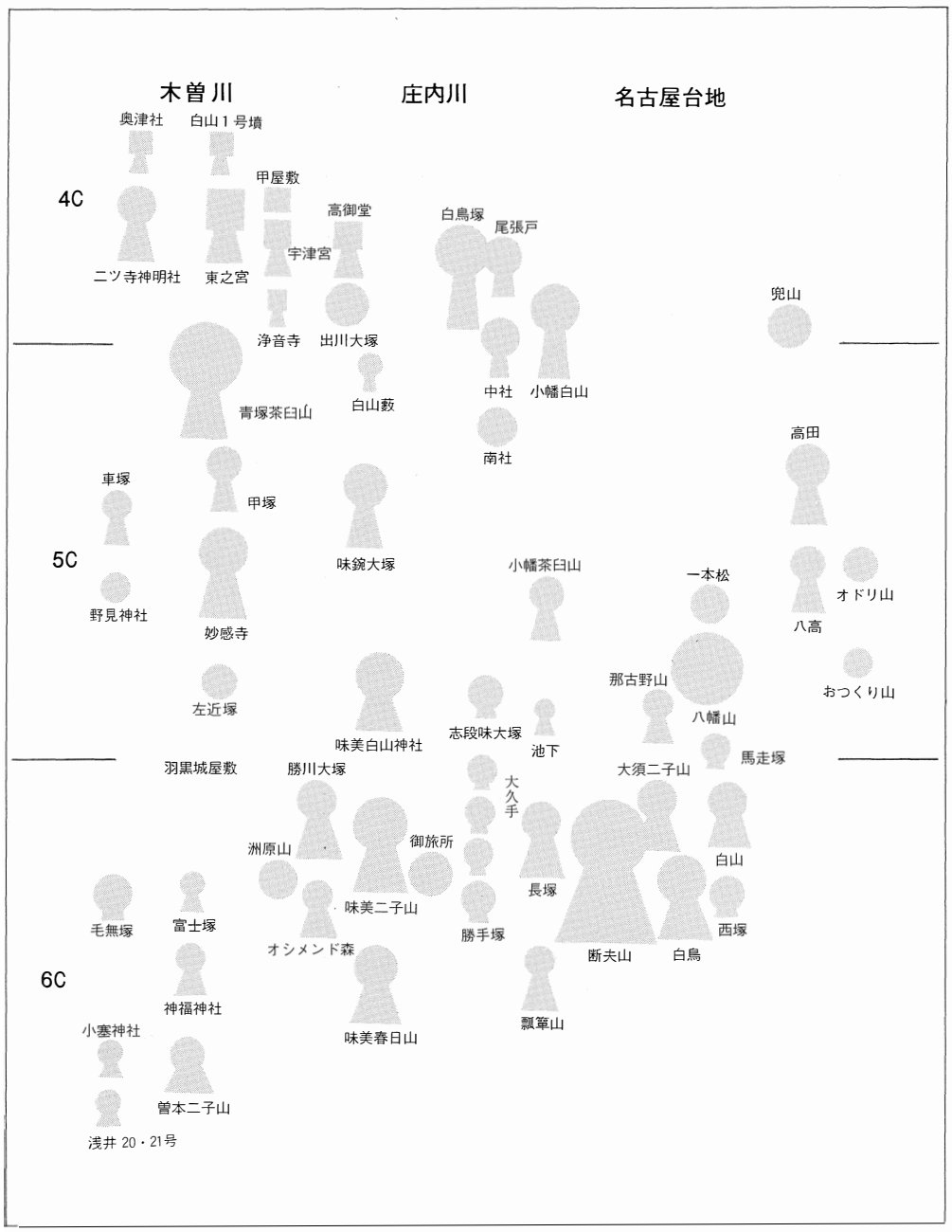
春日井市味美には現在も味美白山神社・二子山古墳・春日山古墳と近接して大規模な前方後円墳が残っている。この地は名古屋市北区味鋺地区にかけて、かつて多くの古墳が存在していた所として知られている。10基近くの前方後円墳を中心に大・小の円墳が「百塚」の名を残すことに象徴されるごとく存在していたのである。これらの主要な大型墳はある特定の時期に集中して築かれたのではなく、5～6世紀にかけて系統的・系譜的に次々と造営されていることがわかっている。この点、他の大型墳の造営地と大きく異なる点であり、凡そ尾張地域で唯一の長期的・安定的な造営活動を実現した所と考えてよい。6世紀前半味美二子山古墳が最大規模を誇る頃、名古屋台地では熱田の地に巨大古墳、断夫山古墳が営まれていたのである。5世紀代の名古屋台地の古墳は、この頃すでに消失、あるいは円墳に限定し大規模な前方後円墳の造営にいたっていない。断夫山古墳はまったく唐突に熱田の台地上に出現してくる。

尾張の国

全長 150m を越す前方後円墳、断夫山古墳は、他のいかなる古墳と比較しても隔絶した規模を持つ。また6世紀前半他の地域でも大型墳が多く出現し、尾張地域の前方後円墳造営の最盛期を迎え、その頂点に立つ古墳といえる。この画期的な造営の背後に、味美古墳群の安定した造営基盤が存在した事は容易に理解されるだろう。

味美への富の動員がやがて名古屋台地上に破格の古墳を築きあげたのである。尾張全地域がある一定の秩序とまとまりを見せはじめるのはこの頃であり、その意味で断夫山古墳の被葬者とは、尾張地域を掌握した英雄的人物と考えることができる。それはおそらく「尾張連」として文献資料上に登場する人々であろう。古墳の時代はかくして断夫山の造営を契機に一つの時代が終焉を迎えることになる。

（赤塚次郎）



尾張地域古墳編年

市町村だより

梅　坪　遺　跡

豊田市教育委員会

本遺跡は名鉄梅坪駅の北東 600m の豊田市東梅坪町３丁目に所在する弥生時代後期から室町時代にかけての複合遺跡である。遺跡は矢作川と篭川の合流点に近い標高約39mの低位段丘上に位置し、周囲の沖積地との比高差は2.5m前後を測る。

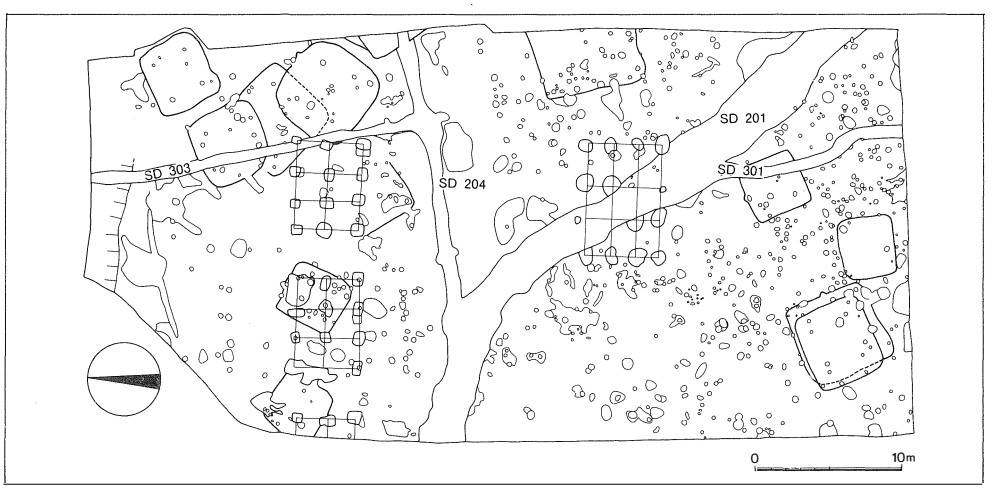
豊田市教育委員会では梅坪東土地区画整理事業の事前調査として、昭和59年度に試掘調査を、続いて61年度に第２次調査 1,715㎡の調査を実施した。今年度は７～10月に第２次調査区域の西隣にあたるＡ地区 1,518㎡の調査を行い、現在Ｂ地区 776㎡を調査中である。遺跡全体の面積は約 20,000 ㎡と推定される。現在までの合計で竪穴式住居跡47軒、掘立柱建物跡７棟、溝状遺構10条、土坑・柱穴多数が検出された。

竪穴式住居跡の年代は弥生時代末期から奈良時代にかけてであるが、大半は古墳時代に属する。検出された住居跡の深さは全般に浅く、現在の地山面は当時の生活面よりかなり削平されたレベルであると考えられる。

上記のうち今年度Ａ地区の調査で検出された主な遺構は、竪穴式住居跡13軒、掘立柱建物跡４棟、溝状遺構５条である。竪穴式住居跡は２軒が弥生時代末期、５軒が古墳時代に属し、他は時期不明である。掘立柱建物４棟はいずれも主軸を南北にとり、特に北側の３棟は規則性が認められるが、年代決定の資料は得られなかった。ＳＤ 201 は幅 2.5～３ｍ、深さ1.5 ｍ 前後の断面Ｖ字形を呈する濠状の遺構である。埋土中層黒褐色土層から５世紀代を中心とする土師器が、下層黒褐色土層からは若干の欠山式土器が出土し、両層の間には比較的短期間に堆積したと思われる褐色土層が存在した。遺構は遺跡が営まれる台地中央部を南東－北西方向に横切り、途中からゆるやかに西方へカーブする形状である。Ａ地区の南西に位置するＢ地区からは同様の遺構が検出されていないことから、溝は環状には巡らず、台地縁辺部へ向かうものと考えられる。また、ＳＤ 301 は、図示していないが、ＳＤ 201 埋土中を北進したのちＳＤ 204 と合流しており、ＳＤ 303 を含めた３条の溝は同時期に利用されていたものと推測される。いずれも幅１ｍ、深さ0.7m前後で、出土遺物から室町時代の遺構と考えられる。このほか調査区内からは奈良時代から鎌倉時代にかけての須恵器、灰釉陶器、山茶碗等も検出されているが、この時代の遺構は確認できなかった。

以上Ａ地区の調査結果を中心に概略を述べたが、現時点では各時代の遺跡の様相をとらえるには不明な点が多く、今後の調査が待たれるところである。

（社会教育課主査　伊藤達也）



第３次調査Ａ地区遺構配置図

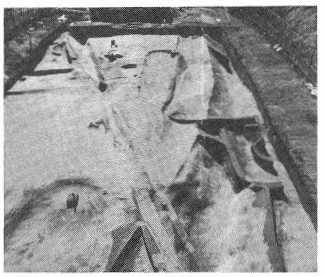
発　掘　ニ　ュ　ー　ス

松河戸遺跡（E区）　春日井市

調査区中央の微高地で縄文時代中期の集落跡を調査した。集石遺構を持つ住居跡3棟ほか、ピット、土坑が多数検出された。集石遺構はチャート・砂岩の原石が数百個単位で人為的に集められている。その周囲にはチャート・黒耀石の石鏃の製品や未製品、石匙、磨製・打製石斧が集中して出土しており、石器の製作址と考えられる。

岩倉城遺跡（B区）　岩倉市

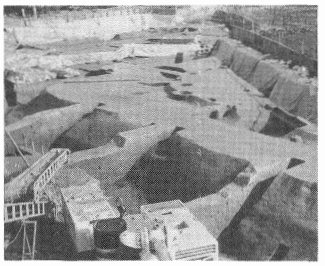
調査区は岩倉城跡記念碑のすぐ北に位置し、本丸跡北部に推定される。15世紀後半から16世紀にかけての溝、土橋、土坑などを検出した。多量の土師質皿のほか瀬戸・美濃産の天目茶碗・香炉・擂鉢や青磁・染付けなどの中国陶磁・漆椀・折敷などの木製品や茶筅・箕・籠などの竹製品が出土した。



清洲城下町遺跡（五条川改修関連B・D区）　清洲町

B区では溝7条、土坑10基等を検出。北西から南東に走る溝2条（16世紀末～17世紀初）は約9ｍの間隔で並走する。遺物は瀬戸・美濃系の皿（長石釉・灰釉等）、天目茶碗等である。

D区では溝9条、方形遺構、土坑等を検出。遺物は天目茶碗、皿（長石釉）、向付（長石釉）等である。



清洲城下町遺跡（新川・清洲線道路拡幅関連E・H・I区）　清洲町

E区において16世紀前半の方形に屈曲する溝を検出。屋敷地を囲む溝と想定される。

H区において清須城の中堀に比定される大溝を検出。さらに、古墳時代後期および奈良時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡を検出し、この時代に五条川の自然堤上に集落が存在したことが確認された。

岡島遺跡　西尾市

調査区は岡島遺跡の西縁に位置している。今回検出された主な遺構は、土坑・溝である。時期は弥生時代中期の後半頃にほぼ限定できる状況であった。なお、調査区西側では、同時期の旧河道も検出しており、周辺の状況なども考え合わせるとこの地点が岡島遺跡弥生時代中期の遺構の西限にあたると思われる。

遺跡紹介

志 貴 野 遺 跡

志貴野遺跡は、旧矢作川右岸の洪積台地縁辺部に立地する。今回の調査は、国道22号線バイパス建設に伴うもので、3000㎡調査した。

その結果、現地表面下40㎝で『碧海台地』と呼称されている洪積層上面に達し、そこで多くの遺構群を検出した。

検出した遺構は、掘立柱建物46棟・竪穴住居31軒の他、多数の土坑・ピット・溝で、今回の調査区が、居住域として利用されていたことが推定される。遺構の分布状況は、調査区全域に一様に分布するのではなく、洪積台地の縁端部が最も濃く、ここを中心に台地側及び洪積低地に至る緩斜面部分では、徐々に薄くなっていく状況である。

これらは、時期的に古墳時代後期～奈良時代前期に属するもの（Ⅰ期）と、ほぼ平安時代に属するもの（Ⅱ期）に大別できる。

Ⅰ期の集落構造は、竪穴住居を主体とするもので、南北二群に分かれて分布している。これらは、付近に所在する志貴野廃寺（西尾市志貴野町）や羽角山山麓の後期古墳群（西尾市下羽角町）などと関係するかもしれない。Ⅱ期は、Ⅰ期の景観とは大きく異なり、掘立柱建物主体に展開し、これに若干の竪穴住居が加わる状況を呈する。

詳細は現在検討中であるが、Ⅰ期集落終焉後、短期間ではあるが、遺跡の空白期が見られる点や、Ⅱ期集落出現期に大型掘立柱建物が存在する点などを考えると、Ⅱ期集落の成立は、Ⅰ期と異なる背景をもつ可能性が考えられる。これらは遺跡内で竪穴住居と掘立柱建物の比率がⅡ期集落において、逆転することと無縁ではなかろう。また、巨視的に見れば、志貴野遺跡の所在する碧海台地東南部の縁辺地区では、志貴野遺跡Ⅱ期集落と同時期の遺物がいくつかの地点で採集されており、志貴野遺跡Ⅱ期集落の成立が志貴野遺跡にとどまらず、かなり広域的な動きであったことが推定できる。

なお、当地域は、掘立柱建物を主体とする西日本的な集落構成地域と、竪穴住居を主体とする東日本的な集落構成地域のほぼ中間位置に立地しており、この点に関しても興味深いものがある。（池本正明）

志貴野遺跡遺構図（1：500）

は竪穴住居
は掘立柱建物

資料紹介

阿弥陀寺遺跡出土の瓜郷式壺

ここで紹介するのは、海部郡甚目寺町阿弥陀寺遺跡から出土した瓜郷式の壺である。

瓜郷式というのは三河地方を中心に分布する弥生時代中期の土器で、尾張地方を中心に分布する貝田町式とはちがって東日本に共通する特徴をもっている。県下では、これまでのところ全形のわかるものが出土しておらず、今回の出土例が初と言える。

阿弥陀寺遺跡では、瓜郷式土器が壺を中心として多数出土しており、このうち全形のわかるものが3点ある。ここで紹介する2点は、同じ土坑から出土したもので、一見同じ様に見えても、細かく比較するといろいろ違いのあることがわかる。

(a) はおそらく三河地方（豊川下流）から直接運ばれてきたもので、現地のものとほとんど見分けはつかない。しかし（b）は、材料の粘土に含まれている砂礫の構成が異なること、瓜郷式の櫛描紋は連続して施され大きな切れ目がないのに対し（b）は切れ目が交差して連続していないこと、胴部の仕上げに二枚貝を用いていることなど、いくつかの異なる点が認められる。

これらのことから、(b) は瓜郷式と共通する部分を有してはいるものの、(a) とは違う地域で作られた可能性が考えられる。現在胎土分析を依頼しているので、その結果が出れば明らかになるであろう。

三河地方の土器である瓜郷式が尾張地方で出土することについては、当然背景に人々の交流があったと見なければならない。特に (a) のような大形の土器が持ち運ばれるとなれば、舟による水上交通の方が陸上交通よりも考えやすい。阿弥陀寺遺跡では漁撈具の出土、貝塚の形成はみていないが、朝日遺跡での海産物獲得のあり方をみれば、海での活動が盛んであったことがわかる。海での活動は漁業にとどまらず、水上交通を利用しての他地域との交易なども含まれる。その場合、壺に何かを入れて運んだかもしれない。

阿弥陀寺遺跡から出土する瓜郷式の壺は、壺そのものが運ばれたというより、何かを運ぶために使われたその最後の姿を示すものと考える。直接に運ばれたのか、他の遺跡を経由したのかはわからないが、物流の一端を示すものとして重要である。

（石黒立人）

(a)

(b)

朝日遺跡出土の異形土器

朝日遺跡 61KL 区において、弥生時代中期の溝から異形土器の一部が出土した。

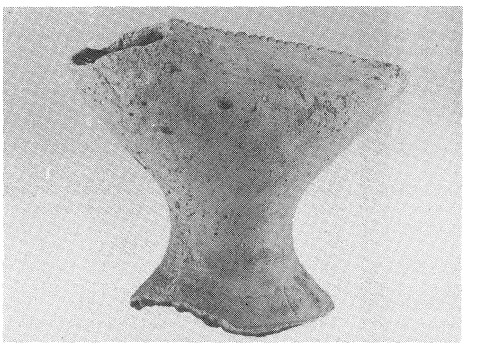
この異形土器は、一見皮袋形土器に類似し、一端に注口をもつ。器面には刷毛目による精緻な調整が全体にわたり施されている。下半部は欠損しているが、壺形土器の体部が続くものと考えられる。

以上の点から、この異形土器本来の形態は鳥をモチーフとした頭部をもつ壺形土器「鳥形複合壺」と考えることができる。

この土器は、体部の文様構成や共伴遺物から弥生時代中期後半（高蔵式期）に属すると考えられる。

弥生時代の遺跡からの出土例で「鳥形土器」として報告されているものは、朝日遺跡３点、静岡県蔵平遺跡１点、愛媛県中村松田遺跡１点の計５点である。いずれも注口をもつ皮袋状の形をした土器である。

従来の「鳥形土器」と壺形土器を組み合わせたような「鳥形複合壺」の出土例は全国でも初めてである。使用形態など不明な点は多いが、今後弥生時代において「鳥」がどういう意味をもっていたかを考える上で重要な資料となりえよう。　（飴谷　一）



センター日誌

来　訪　者（62.12.１～63.2.29）

12・２　西三河社会科研究会　52名。
〃　県派遣社会教育主事研修会　22名。
・４　県行財政委員視察　21名。
〃　新城市教育委員会　３名。
・７　甚目寺町教育委員会　２名。
・11　元興寺文化財研究所　増澤文武氏。
・22　海部教育事務所課長他　14名。
・23　藤岡町教育長他　５名。
・25　日進町教育委員会　３名。
１・７　吉良町教育委員会教育長　他３名。
・12　岡崎市教育委員会　４名
・26　東京国立博物館　矢部良明氏。
２・１　青森県埋蔵文化財調査センター所長他２名。
・２　栃木県文化振興財団常務理事他１名。
・３　神奈川県埋蔵文化財センター次長他１名。
・８　県政功労者視察　28名。
・９　海部郡広報担当者視察　40名。
・13　神戸市教育委員会学芸員　２名。
・13　高槻市立埋蔵文化財調査センター森田克行氏。
・18　蒲郡市文化財審議委員　10名。
札幌市教育委員会文化課　羽賀憲二氏。
・19　尾張地域建築行政研究会　20名。

現地説明会

３・５　岩倉城跡　参加者　約300名

記　録

１・26～27　愛知県埋蔵文化財調査センターにおいて、県内市町村の埋蔵文化財担当者を対象として、<専門研修会>を開催。参加者は66名。

埋蔵文化財愛知　No.12

発　行　昭和63年３月
編　集　(財)愛知県埋蔵文化財センター
〒498　愛知県海部郡弥富町大字前ケ須新田宇野方802番24
ＴＥＬ　05676－7－4161
印　刷　東海プリント社